

【おもな登場人物】

○山崎耕作(やまざきこうさく)

・一九一三年生まれ。有楽町で劇場勤務をしたのち、徴兵されて上海の病院で勤務する。終戦後は再び有楽町の劇場地下で寝泊まりしながら、吸い殻を拾って浮浪生活を送るが、たまたま出会った川上に触発されて、かねてより夢見ていたエロ雑誌の創刊に向けて歩き始めることになる。三十代にして見事な白髪になっている。

○川上一(かわかみはじめ)

・山崎が有楽町で出会った三歳年下の青年。虚弱な体格で、レンズの分厚い眼鏡がトレードマーク。戦時中は大日本産業報国会で勤務していたが、終戦後良質な印刷紙二百連分を横取りし使い道を模索していたところ、山崎に出会い彼の夢に協力することを決意する。

○南原梅雨(なんばらばいう)

・エログロナンセンスの時代に活躍した伝説の出版人で、「天下の猥出版狂」の異名を

持つ。古今東西のエロ資料を漁っては出版し発禁処分を食らい続けた武勇伝がある。彼が携わったエロ雑誌『ばらいそ』は出版人の間では有名で、山崎はこの雑誌を見つけたことでエロ雑誌創刊を目指すことになる。官憲を嘲笑うような挑発的な文章が特徴。

【前回のあらすじ】

上海の軍病院に勤務する山崎耕作は、劣悪な労働環境下にありながらも自らの人生を「諦め」ることで苦痛に耐えていた。そんなある日、山崎は上海の古書店で『ばらいそ』という日本の猥雑誌を手に入れる。『ばらいそ』は南原梅雨という男によって出版され、当局に対する鮮やかな諷刺が込められていた。

戦争が終わり、山崎は引揚船の中で『ばらいそ』を読みながらいつか自分もエロ雑誌を創刊したいと考えるようになる。しかし引揚後の日本は空襲によって焦土と化しており、実家も焼け落ちた山崎は劇場の地下室で吸い殻を拾って生計を立てていた。しかしその劇場地下も警官によって立ち退きを命じられてしまう。路頭に迷った山崎だったが、たまたま助けた川上一と話すうちに「エロ雑誌を創刊する」という夢を思い出し、夢を追うことを決意する。大量の印刷紙を所有する川上も、山崎の壮大な夢に乗ることを決意し、二人は焼跡の東京を歩き始めた。

連載小説

痴れ者よ

第二回 「虫眼鏡と拳銃」

市川いちかわつかさ幸

「むかしイむかし浦島はア、助けた亀にイ連れられてエー。おい耕作、何笑ってんだ。俺はお前を寝かしつけるために歌ってやっつてんのに、それじゃ意味がねえじゃねえか。ほら、目を閉じろ」

「だっっておとうさんのおうた、なんかへんなんだもん」

「この野郎、人が一生懸命やっつてんのに馬鹿にしやがって。しょうがないだろ、俺は小学校で歌なんか習わなかつたんだから。つたく、かあちゃんが風邪ひいて寝込んだり

まっつたんだから、音痴でもポンチでも何でもいから、ほら、さっさと寝ろ。お前も浦島太郎みたいに白髪のじいさんになつちまうぞ。エエ竜宮城へエ来てみればア……」

「ちよつとあんた、その音痴な歌やめておくれよ。耕作だけじゃなくてあたしまで起きちやつたじゃないか」

「なんでエ、かあちゃんまで俺を馬鹿にしやがるのか。病人は病人らしく寝てりゃいいんだ。戻れ！」

「あんたもわかんないねえ。寝ようと思っ

ても寝れないから言っつてんじやないか！」
「何をう。寝ようと思えば寝れないことなんてあるもんか」

「あはは、とうちゃんとかあちゃんがけんかしてらあ——」

目を覚ますと、父親も母親もいなかった。

『浦島太郎』の絵本も見当たらない。

だが、見たことのある顔があった。牛乳瓶の蓋のような眼鏡をかけた男が、にこにこと山崎のほうを見ていた。

男の名は川上一。

「山崎さん、おはようございます。よく寝むれましたか」

「うん、そうみたいだね」

「ずいぶんと楽しそうでしたけど、どんな夢を見ていたんですか？」

「夢……ああ、夢か。そうだ、夢を見ていた。俺の親父とおふくろが喧嘩をしていたよ。親父が俺を寝かしつけるために『浦島太郎』を子守唄にうたうんだけど、浪花節みたいになうたうもんだから可笑しくってさ。熱出してるおふくろも怒って起きてきちゃ

うしき」

「なるほど、浦島太郎ですか。じゃあその頭は玉手箱のせいってことですかね」

川上は山崎の頭を指さした。何かと思いついて頭を触ってみると、人差し指に白い毛が一本ついた。

山崎は川上を睨んだ。

「俺をだまして驚かそうだったって、そうやすやすと引つかかるもんか。この髪は玉手箱のけむりでも、DDTでもなくて、自然となったものだ。だまされないからな、俺は」

「いやあ、寝ぼけている山崎さんなら引つかかると思ってたんですけどね。もしかして、白髪は山崎家の遺伝ですか」

「さあ？ でも俺の親父は俺ほどきれいな白髪じゃなかったぜ。ところどころ黒い毛も混ざっていたし」

「なるほど、それならいよいよ本当に玉手箱かもわかりませんね」

山崎の表情が陰しくなった。

川上は逃げるように部屋の窓を開けた。

「ほ、ほんの冗談ですよ。自分はずっと

用事があるので下にいます。このまま寝て

いてもいいですが、顔を洗うときは注意してくださいよ。今日の水はとんでもなく冷やっこいですから」

川上が出て行き、部屋には山崎がひとり残された。三畳一間の狭い部屋である。家具は棚がひとつ。中身はから。その傍にくたびれたリュックサックがひとつ口を開けている。

山崎は昨日のことを思い出していた。

昨日の朝は川上ではなく、警官に揺り起こされた。解体工事のために、劇場地下で寝泊まりをする浮浪者たちを追い出しに来たのである。シケモクを拾って生計を立てていた山崎も漏れなく追い出され、ゆく当てもなくなったところ、大八車を引く川上と出会い、すったもんだあつて一緒にエロ雑誌の創刊を目指すことになった。

そして今は川上の住んでいるアパートの一室を借りている。

もともとは産業報国会のメンバーが住んでいたが、解散後は皆あちこちに散ってしまつて残っているのは川上ともうひとりだ

けだという。

(浮浪者同然の俺からしたら、まるで竜宮城みたいなもんだなあ)

廊下の洗面台で顔を洗っていると、窓の外では灰色の空が広がっていた。アパートは二階建てで、幸運にも空襲の火を浴びていない。

部屋に戻ろうとすると、階下からどたどたと音がした。誰かが走っている。

「おうい、ハジメ！ 紐あるか、紐！」

野太い声だ。

「紐なんです、見当たらないんですよ。

どこかで見ていませんか村岡さん」

「俺は知らねえぞ。さつきお前に預けたじやねえか」

山崎がふと見ると、部屋に紐の束が転がっていた。きつと川上がさつき部屋に来たときに忘れていったのだろう。束を掴むと、急いで階段を降りて行った。

「紐ならここ！」

部屋を覗いてまわっていた川上が振り返った。

「あつ、山崎さん。ありがとうございます！」

よかった、失くしたのかと思つていました」

川上は山崎から紐を受け取ると、玄関から外に飛び出していった。川上は背丈が小さく、まるで兎が飛んで行くように見える。

釣られて山崎もアパートの外に出た。

アパートの外にオート三輪が停まつていて、その前に木箱が三つ、その上に男がひとり乗つて紐を巻き付けている。男は図体が大きく、肩幅が大きい。半袖シャツからこぼれる筋肉をしぼり、今にも千切れてしまふほど強く紐を引っ張っている。

「おいハジメ、その箱はもう乗つけてくれ」

男が言うと、川上は足元の木箱——これがかんりの大きさである——に手を伸ばし、力を込めて持ち上げようとした。だが、持ち上がらなかつた。箱の底面が地面からほんの少し浮かんだけばかりであつた。

「ハジメ、非力にもほどがあるぞ」

「そんなこと言つたつて、村岡さん、ない袖は振れませんよ」

「おまえだつてじきにここを出ていくんだらう？ 荷物はどうするんだ。木箱ひとつ

持ち上がらないようじゃ、いつまで経つても引つ越せないぞ。そしておれの引つ越したつていつまでも終わらん」

村岡が苦笑し、川上は申し訳なさそうにその場に腰を下ろした。

「箱はそこに置いておいてくれ。こいつを片付けたら積み込む」

村岡は再び紐との格闘をはじめた。

アパートの入口から一部始終を眺めていた山崎は、ほとんど無意識的に飛び出して、川上の傍の箱に手をかけた。

「山崎さん、どうしたんです」

「どいてくれ。俺が運ぶ」

「その箱は重たいですよ。ちつとも持ち上がらない。山崎さんだつて徴兵検査じゃ散々だったんでしよう、無理ですよ」

「荷運びは上海で死ぬほどやったさ。大体中身は消毒液と、薬瓶と、包帯と、『皇軍連戦連勝セリ』だった。これがとんでもなく厄介なやつなのさ。重くつて重くつて」

山崎は腕と腰に力を込めた。川上の言う通り箱は重たかつたが、山崎にとつてはすでに何度も経験している重さだつた。体の

二点に力を集中させ、箱は地面を離れた。額に汗の玉が滲んだ。

ようやく紐を結んだ村岡は、見慣れない男が箱を持ち上げているのに気づいた。村岡から見て彼は決して力があるようには見えなかつたが、必死に箱を持ち上げ、一歩ずつ運んでいった。

(あの男は昨日やつてきたやつか?)

そんなことを考えているうちに、男は箱をひとつつオート三輪の荷台に積んでしまつた。いくら大陸で働いた経験があるとはいへ箱は相当な重さで、山崎のシャツにはぼつぼつと汗の染みができている。

「君」

村岡は腰かけていた箱から飛び降りると、山崎に駆け寄つた。

「君は昨日ハジメが連れてきた人だね？ よくその細い体で箱を持ち上げられたものだ。俺は村岡武(むらおかたけし)。君、名前は何て言うの」

「山崎耕作です」

「山崎君か。手伝つてくれてありがとう。残っている箱は俺が運ぶから、君とハジメ

は先にアパートに戻っていてくれ。あとで茶を淹れよう」

「この荷物は何の荷物ですか？」

「これは俺の引っ越し荷物だよ。明日にはここを離れて、新しい職場に行かなければならないんだ。もうこのアパートに住んでいるのは俺とハジメだけになってしまったからね」

そう言うのと村岡は紐で縛った箱を軽々持ち上げてオート三輪に積み込んだ。村岡は山崎より頭一個分背が高かった。まさに巨軀の為せる技である。

積み込みが終わると、村岡は茶と蜜柑を持って部屋にやってきた。部屋では既に山崎と川上が座っている。

「お待たせお待たせ。さつきは二人とも、手伝ってくれてありがとう」

「いや、僕なんかぜんぜん力になれませんでした」

「そう申し訳なさそうにしないでくれ、ハジメ。あれは俺も言い方が悪かった」

山崎は盆の上の蜜柑に手を伸ばした。皮の硬い実で、強く爪を食い込ませてやっ

剥くことができた。

「山崎君は大陸のほうに行っていたんだってね」

「はい、上海にいました。そのあと少しだけ、釜山にも」

「ほお、上海に。上海といったら、俺が子どもの頃は夢の国際都市って言われたりしていたが、戦争中はそんな暢気じゃなかっただろうね。俺はずっと日本にいたものだから、戦争に行った人間のつらさがわからないんだ」

「戦争に行っていないのに、そんな筋肉質なんですか。俺なんかてつきり、予科練かどこかに入っていたのかと」

「よく言われるよ。だけど本当にどの軍にも入っていないんだ。戦時中は専ら、アメリカから盗んだ文書の翻訳と、産報の下働きをしていたからね」

この筋肉は、と言って村岡はシャツの袖をまくった。ぼっこりと大きな筋肉の塊が腕に搭載されていた。

「こいつは学生の頃に柔道をやっていて鍛えたものだ。力こぶも昔はもつとあったん

だが、使わないもんで小さくなっちゃった」

山崎もシャツをまくって力こぶを作ってみた。力を込めてもなだらかな山しか出来なかったが、隣の川上のそれはほとんど無いに等しかった。

話題は、昨日やってきたばかりの三十二歳の男の話に移った。

村岡は山崎が引揚後浮浪者同然の生活をしていたことや、川上と一緒にエロ雑誌の創刊を目指していることを聞いても、笑いもせず、貶しもせず、角ばった顎を右手でつまみながら「うん、うん」とうなずいていた。

「なるほど、君がエロ雑誌に人生を懸けるつもりなのはわかったが、どうしてエロ雑誌にこだわるんだ？ 文芸雑誌じゃなくて？」

「俺は無学ですし、なんかこうしつかりした確信があるわけじゃないんですけど、今の日本人はエロを求めているんじゃないかなって思ったんです。俺は上海の病院で働いていたとき、毎日牛馬のようにこき使われて、なんかもうすべてがどうでもよくな

っていたんですけど、そんなときにたまたま古本屋でエロ雑誌を見つけて、すごい興奮したんですよ。もちろん、エロいから外にこんな自由な世界があるんだなって感動したんです。エロ雑誌を見てこう思ったのは、きっと俺だけじゃない。古本屋の店主に聞いたら、エロ雑誌を買っていくのは日本軍の兵士ばかりって言うてたし、引揚のときに出会った真面目そうなやつも、モード写真を宝物のように大事にしていた。たぶんエロって、不思議な力があると思うんですよ」

一気呵成に話した。口が乾いて、熱い茶を一気に飲みほした。

村岡は山崎の話をやはり顎を触りながら聞いていたが、ふと川上のほうを向き

「それでお前が運んできた印刷紙、というわけか」

と言った。

「はい。僕はこの印刷用紙二百連を、山崎さんの賭けのために使おうと考えています」
「なるほど……。ここのところ、ハジメは

やるのが大胆になってきたな。産報に入ったばかりの頃は、得意先に電話をかけることさえ怖がっていたヒヨッコが、今では産報から紙を盗んで、得体の知れない浮浪者の夢のために使おうとするとはね。いや、君の決断を非難しようというわけじゃない。俺としては拍手を送りたいくらいだ」
村岡は蜜柑をひとつ手に取ると、一部分だけ皮を剥いた。

「そして山崎君。君の読みは案外当たるかもしれないよ。今、日本中に自由と開放を求める空気が広がっている。戦時中、さんざん当局が言論の締め付けをやってきた反動で、今にもエネルギーが弾け飛びそうになっている。たとえるならば、この蜜柑だ。かつては硬い皮があったせいで中身は漏れ出することもなかったが」

村岡は蜜柑を掴むと、力を込めた。実の形が歪み、間もなく蜜柑はパンツと音を立って破裂し、皮を剥いた部分から勢いよく果汁が噴き出した。

「すこし力を込めればこのようにエネルギーが溢れ出すに違いない。だが、今現在

はまだそこまでになっていない。なぜならば、実に力が送られていないからだ。もし実の外側から力を送り込むことが出来れば、この日本という果实からは甘い果汁が吹き出すだろう」

村岡武という人間は決して人前で目立つのを好む人間ではない。むしろ裏方に回ってこつこつと業務をこなしていくタイプの、堅実な労働者なのだが、他人に物を説明するときはこのように面白い比喻を使った。「ちよつと見せたいものがある」

山崎と川上が座っている背後に本棚がある。村岡はその中の一冊をとり出した。雑誌である。表紙には平仮名で「りべらる」と書かれていた。

「こいつは今月、十二月一日に太虚堂書店が出した『りべらる』(注①)だ。今のところ、日本で最も自由な雑誌はこれだろう。読んでごらん」

山崎は村岡に渡された『りべらる』を開いた。

まず驚いたのが、執筆陣である。船橋聖一(注②)による「巻頭」をはじめ、武者小

路実篤、亀井勝一郎(注③)、大佛次郎、菊池寛、小島政二郎(注④)など、名のある作家たちが名をそろえている。

しかし山崎としては、執筆陣よりも作品名のほうに目がいった。「自由に就いて」「恋愛の復活」「痴言」「アメリカの男女共学制」「接吻の美学」。戦時中にあれほど当局が嫌っていた「恋愛」や「自由」や「アメリカ」という言葉が、堂々と使われている。まさにリベラル、といったところである。

山崎は一瞬、自分がやろうとしたことを『りべらる』に先んじられたと思った。しかし中身を流し読みして、その不安はなくなった。

「村岡さん、なんかこの雑誌、思ったよりも普通ですね」

どの作品も、どこか見慣れた感があるのである。

村岡はにやっと笑った。

「気づいてくれたかい？ そうさ、この雑誌は平凡なんだ。たしかに恋愛や自由といった華々しい言葉を並べてはいるが、やっていることは戦前に作家たちがやっていた

ことと同じだ。つまりは攻めの姿勢がないんだ。言ってしまえば、前の時代の作家たちがちよつと体を伸ばしてみた程度なのさ。これでは朝の鶏鳴の代わりにはなれど、蜜柑の皮を破る力にはなれない。もし山崎君がエロ雑誌を創刊するなら、もつと過激なものを作ってほしいと思うなあ」

そう言うと、村岡は蜜柑を口に運んだ。

「村岡さん」

川上である。

「すこし相談があるのですが」

「んん、どうした？」

「検閲の件なんです」

「ああ、それはなかなか厄介な問題だな」

検閲。

これについては、少し紙幅を割いて話さなければならぬ。

昭和戦前・戦中は紛れもなく検閲との闘いの時代であったといえる。明治から昭和にかけて制定された数多の統制法——「出版法」をはじめ、「新聞紙法」、「治安維持法」など——を根拠に、内務省警保局が苛烈な言論統制を実施した。

不敬、反軍、反戦、平和、革命、私有財産制の否定、姦通、猟奇、風俗壊乱。これらに該当すると判断された書物は、警保局からの注意を受けたのちに伏字になるか、発禁処分になった。最悪の場合、著者および出版社が逮捕されるというケースもあった。

一九四五年八月、日本は戦争に敗れた。

日本国民は古い時代の終焉と、アメリカがもたらした自由の空気のもと、言論統制の終焉を期待した。事実、この年の十月に言論統制の親玉的存在であった特別高等警察と治安維持法が廃止されている。かつて戦時中に休刊していた大手の雑誌『文芸春秋』や『文藝』の復刊を皮切りに、雑誌の復刊や創刊が相次いだ。

しかし、これはあくまでも「古い言論統制」が終わりを迎えただけであった。GHQによる「新しい言論統制」が、このときすでに立ち上がっていたのである。

ひとりの男がいた。

ドナルド・フーバー。階級は大佐。戦時中彼はマッカーサーの対敵諜報部に属し、

フリーピン戦線で日本軍と戦ったのち、九月一日に日本に上陸した。目的は日本における民事検閲の基礎作りのためである。

上陸に際して、フーバーはある組織を率いていた。「CCD」(注⑤)。日本語で「民間検閲局」。上陸後フーバーはただちにCCDに、占領下の郵便、電信、電話、軍事戦略、諜報の入手を開始させた。

CCDの仕事はおそろしく早かった。九月三日の時点ではすでにラジオと新聞の検閲に着手していた。フーバーは一日も早い検閲体制の完成を目指し、かつて情報局総裁を務めていた緒方竹虎(注⑥)にピストルをちらつかせた会談を行なって新聞への統制と検閲体制の準備を進め、九月十九日に「プレス・コード(日本に与うる新聞遵則)」を発表した。

「新聞遵則」とは言っても、その効力はあらゆる活字メディアに及んだ。これによって占領下における日本の検閲が開始された。コードの項目は三十を数え、項目に違反した新聞や雑誌は出版停止を命じられた。山崎と川上はエロ雑誌の創刊を目指して

いるわけだが、これは戦前・戦中であれば姦通、猟奇、風俗壊乱などに該当し、発禁処分になる。しかし古い日本の言論統制はすでに過去のものとなっているため、これらは山崎を縛ることはできない。

ではプレス・コードではどうなのか。プレス・コードには、猥褻な文書を摘発する条項がないのである。つまりこの条項を信じるならば、エロ雑誌を発刊しても検閲の餌食にはならないのである。

しかし川上は不安である。「検閲機関のCCDの存在についてほとんど情報がないんです。だから表向きではエロ雑誌の発刊が許されていても、後になってGHQから目を付けられる可能性があるんです」

「おいおい、そんなのありかよ」
山崎は食べ終わった蜜柑の皮を握りつぶした。

「理不尽かもしれないが、日本はアメリカに負けた敗戦国なんだ。山崎君が憤る気持ちはその通りなんだが、俺たちの自由ってというのはアメリカの機嫌次第なのさ」

「そうなんです。だからもし僕たちが人生を懸けて雑誌を創っても、すぐに摘発されてしまうかもしれない。迂闊に手を出すことができないんです」

山崎と村岡が大きいため息をついた。アパートの外で豆腐屋のチャルメラがか細い声で鳴いている。

「今思いついたんだが」
村岡が口を開いた。

「実験をしてみないか？」

「実験？」

「そうだ、実験だ。一回試しに本を出してみろんだよ。摘発されても痛くもかゆくもない本をな。内容は卑猥なやつがいいな。それで検閲に引っかけたら、雑誌を出すのは諦めたほうがいい。何事もなかったら、GHQは猥褻な本を規制しないってことになる。安心してエロ雑誌を出せるぞ」

「なるほど！いきなり本隊を出すんじゃないけど、まずは斥候を派遣するというわけですね」

「でも、その斥候はどうやって用意するんです？ 実験の結果次第では、出版した俺

ただけじゃなくて、作者まで捕まるかもしれないんですよ。リスクーだ。そんな危険と隣り合わせの実験に協力してくれるほどのいい作家がいるんすかねえ」

「たしかに……」

「いや、山崎君、ハジメ。これは戦争じゃない。斥候は生きていなくてもいい」

「どういうことですか」

「死んだ人間の作品を出せばいいんだよ。」

この世にいない作家の作品なら、作者が捕まる危険はない。手錠をかけようたって、その手はもう墓の中なんだからな。既に死んでいる作家の作品で、卑猥なやつを手に入れて出版すればいいんだよ」

「でも、その作品はどうやって手に入れるんすか。死んだ作家の、しかもエロい作品なんて、そうそう転がっているもんじゃないでしょう」

「大丈夫だ。俺につてがある。エロ・グロに詳しい人でな、戦前に発禁になった小説の原稿や本をたくさん保存しているんだ。その人に掛け合えば、死んだ作家の作品を手に入れることができるかもしれない」

「いったい誰ですか」

川上が前のめりになり、その拍子に蜜柑の盆がひっくり返った。

「ハジメ、豊島の平井先生を知っているだろうか？」

「豊島の平井先生って、平井太郎先生のことですか？」

「そうだ、その平井先生だ」

「なるほど、平井先生ならそういう危ない作品もたくさん持っていそうですね！」

「だろ？ 年が明けたら、平井先生のお宅を訪ねてごらん。そうそう、手土産に甘いものを忘れずにな。平井先生はまんじゅうが好きだから、三原堂(注⑦)のまんじゅうを持って行くといい。きっと機嫌を良くされるだろう」

興奮している二人をよそに、山崎は話を理解できずに置いていかれていた。

「あの、そのライター先生ってどなたなんです？ 俺は聞いたこともないですけど、コレクターの方ですか。それとも学者？」

「ああ、すまんすまん。出版関係の人間だったらこっちの呼び方のほうがしっくりくるんだが、普通の人には通じないな」

「平井先生は小説家です。本名が平井太郎で、筆名は江戸川乱歩。推理小説の大家、江戸川乱歩先生ですよ」

江戸川乱歩。本名は平井太郎。

日本の推理小説は、このひとりの男によって確立されたといっても過言ではない。

『二銭銅貨』『心理試験』と立て続けに推理小説の傑作を発表して文壇に躍り出て以降、海外文学と日本社会を折衷させた本格推理小説を書く傍ら、怪奇小説や通俗小説の書き手としても活躍した。

東洋のエドガー・アラン・ポーと称されたこの巨人には奇癖があった。彼は七十年間の生涯で、実に四十六回もの転居を繰り返した。日本の家屋と西洋式ミステリを融合せんとした男には、これらの転居も重要な執筆資料になったのかもしれない。

そんな転居魔が最後に腰を下ろしたのは、豊島区であった。一九三四年、乱歩は立教大学と隣接するこの土地に居を構え、一九六五年に死没するまでついにここを離れな

かった。今では乱歩邸は立教大学の所有となり、周辺も建物がひしめき合う住宅街となっているが、乱歩がやって来たころは都会の喧騒から離れた田園地帯であった。

山崎と川上は、乱歩邸を訪れるとすぐに洋館に通された。様式住宅には不似合いは正月の飾りと門松に迎えられ、応接間に通された。

応接間は丁字のテーブルを中心に、椅子が六つ。それらを一口で呑み込まんと、大きな暖炉が口を開けている。

「あ、雪」

硝子窓の向うでは雪がちらついていた。

「先生は間もなく来られますから、しばらくこちらでお待ちください」

手伝いの女が紅茶を二人の前に置いた。

「紅茶なんて久々に飲む」

山崎はもうもうと湯気がのぼるティー・カップを傾けた。指が震えている。戦争で日本を留守にしていた山崎ですら、江戸川乱歩の名前は知っている。それどころか、青年時代には彼の小説を愛読したファンでもある。それなのに、今乱歩の家で紅茶を

啜っている。それを考えると指先が震えるのだ。

「ハジメちゃんはここに来たことあるの？」

川上は、一瞬自分の名前が呼ばれたことに気付かなかつた。もう一度「ハジメちゃん」と呼ばれて、

「ぼ、僕のことですか！」

と驚いた。

「この部屋にハジメちゃんが二人もいるかよ」

「いや、山崎さんにハジメちゃんだなんて呼ばれるのは初めてだったものですから。」

えっと、平井先生のお宅を訪ねたことは若手編集者時代に二、三度ありますが、せいぜい玄關までで、中にお邪魔したのは今回が初めてです。平井先生に直接お会いするのも今回が初めてで、正直緊張しています」

「ふうん、それにしても落ち着いて見えるなあ。ねえ、ハジメちゃんって誰に対して敬語を使うの？」

「そう、ですね。敬語を使っていれば誰に対しても失礼になることはありませんから」

川上一は平和主義者であった。他人との

争いを好まない。自然とその口調は丁寧になるし、山崎のように出会って間もない相手に対しては、視線はあくまでも低く、まだ場所のわからぬ逆鱗に触れることなどないように接する。

山崎は、そんな川上の心の底が透けて見える。

彼もまた、上海では上官の機嫌をとって生きてきた人間だ。だからこそ、ご機嫌取りが何も生産しないことを知っている。おべっか使いの積み重ねが、すなわち時間の浪費であることを、知っている。

山崎は言った。

「俺にはさん付けをしないでほしい」

「え」

「これからは一緒に仕事をしていくんだ。いつまでも山崎さん山崎さんじゃ、なんだか距離があるようでいけない。距離があっちゃ、腹の中の言葉を出すときに躊躇っちゃう。互いにくだけて話そう。俺は君をハジメちゃんと呼ぶ。君は呼び捨てで山崎、とでも呼んでくれ」

困ったのは川上である。

たしかに山崎の言わんとすることはわかる。要するに山崎は、川上を仕事仲間として扱いたいのだ。

でも、躊躇してしまふ。まず川上は山崎より年下なのだ。川上は一九一八年生まれの二十七歳、対して山崎耕作は一九一三年生まれの三十二歳、歳の差は実に五か年。背丈に関しては頭一個分以上の差がある。それに川上は童顔で、年齢や身長以上に幼く見えるのである。

呼び捨ては、かえって肩に力が入る。

「や、コーさんじゃだめですか。山崎耕作さんじゃなくて、コーさん。呼び捨てはやっぱりへんな感じがして、ほら、コーさんだったら同業者っていう感じがするでしょう？」

「ん、コーさんか。いいね、コーさん。なんだか鳶職みたいだけど、親近感がある。

正直、敬語じゃなきゃ何でもいい」

川上はほっと息を吐いた。

「それでは、これからはコーさんって呼びますね」

『「これからはコーさんって呼ぶね」ね』

「こ、これからコーさんって呼ぶね！」

川上一にかぎらず、これまで使ってきた口調を変えるのは難しい。

(でも、次第に慣れてくるかもしれない)

ノックもなく応接間の扉が開いた。

「いや、申し訳ない。実に申し訳ない。待たせてしまったかね」

黒縁眼鏡をかけた禿頭の男が入ってきた。黒い着物を纏い、右手に茶封筒を持っている。山崎はその落ち着き払った様子から、

直感的に彼がこの家の主だとわかった。

「客人が来るまでにあと一枚だけ書いておこうと思ったのだが、思ったよりも時間をかけてしまった。手伝いが呼びに来なければ君たちを一日中この部屋に閉じ込めてしまふことになっていただろう。申し訳ない。私は江戸川乱歩。おや、君たちは見たことのない顔だね」

乱歩は山崎と川上から反対側の椅子に腰を下ろすと、まじまじと二人の顔を眺めた。

太く黒い眉が下がっている。

「はじめまして。山崎耕作と申します」

「川上一です」

山崎は荷物の中から紙袋を取り出し、乱歩の前に出した。

「つまらないものですが、どうかお納めください」

紙袋の中身はまんじゅうであった。

「これはこれは、三原堂のまんじゅうかね？ そうらしいね。いや、私はこの店の

薯蕷(じょうよ)まんじゅうが大の好物でね」
三原堂は池袋にある和菓子屋で、乱歩はこの店の薯蕷まんじゅうというのは大和芋、砂糖、米粉を用いた生地のもんじゅうで、「上用まんじゅう」とも呼ばれている。

乱歩は口元を綻ばせながらまんじゅうの箱を袋に戻した。山崎も川上も、内心では村岡の作戦がうまくいった、と思っっている。あとはうまい具合に説得をすればいいのだが。

「ところで君たちは、どんな物がほしいのかね」

話を切り出したのは乱歩であった。

まだ山崎は、乱歩邸を訪問した理由を一言も話していない。二人の顔に驚きの表情

が浮かんだ。

「原稿取りは応接間に入らない」

紅茶を一口啜った。

「原稿取りはせっかちな連中でね、どこの雑誌の人間もいち早く私の原稿を貰おうと、応接間ではなく書斎のある蔵を訪れる。応接間で待っていては時間がかかるし、今日のように私が客人のことを忘れてしまうこともあるからね。とりあえず、君たちは原稿を貰いに来たわけではない。そして原稿依頼でもない。自分で言うのもなんだが、私は人気作家だ。その私に原稿依頼の交渉をするなら、君たちのような若手ではなく手練れの人間を寄越すだろう。君たちの表情に余裕があるところを見ると、借金願いでもない。見知った顔でもないから仲人の依頼でもないね。となると、のこるのは私に物をねだる人間だ。何が欲しいのかね？ サインかね？」

乱歩は眼鏡をかけている。その奥では細長い目が客人の顔を捉えていた。小説の中の明智小五郎ほどではないにしろ、相当な観察力である。

乱歩は作家生活に入る前の一時期、探偵

業をしていたことがある。この経験がのちの明智小五郎ものに繋がったことは言うまでもないが、そこで養われた人間観察眼には一般人のそれを上回っていた。

虫眼鏡ですっかり観察されてしまった山崎に代わって、川上が話し始めた。ひ弱な見た目でいかにも打たれ弱そうな彼だが、こういう交渉の場においては妙な度胸がある。

「私たちは先生にある原稿をお借りしたいのです。といっても先生の作品ではありません。先生が蒐集しているという戦前の作家の、それもエロの要素があつて、作者が亡くなっている作品を探しているのです」

乱歩は我慢ができなくなつたらしくまんじゅうの箱を開け始めた。箱の中から白いまんじゅうをひとつ出して口に含んだ。

「珍しい依頼だね。たしかに私は一昔前の作家の原稿や書籍をコレクションしているが、余程の物好きでないとそんなものは欲しがらない。何か企んでいるかね。すこし聞いてもいいかね？」

今度は山崎が口を開いた。

山崎は自分たちがエロ雑誌を創刊するつもりであること、GHQの検閲の状態が不透明なため試しに本を出してみたいこと、そのための原稿を探していることを話した。話していると、次第に口調が熱を帯びてきて姿勢が前のめりになっていく。

乱歩はまんじゅうを頬張りながら話を聞いていた。

戦争が終わり、戦前の思想統制が解除されると多くの作家が新しい作品を発表し始めた。戦時中思うように出版ができなかつた鬱憤を晴らそうというのである。

乱歩の周辺にもそういう作家が多かったし、そういう作家を連れて新しい雑誌を創ろうという出版人も続出した。先述した菊池寛はその先頭に立っていたといえる。しかし一部を除きほとんどの新興雑誌は数年も持たずに廃刊した。

ここ豊島の自邸で執筆活動続ける乱歩も、そういう時代の空気を感じている。(だが、この男は何かが変わっている。情熱的、という点では同じなのだが、何かたく

らみのようなものを感じる。ただ時代に乘るのではなく、むしろ時代を自分のほうへ引き寄せようとしているような……)

山崎が話し終わると、乱歩は口の中のまんじゅうを紅茶で流し込んだ。気が付けば、八個あったまんじゅうは残りひとつになっていた。

「山崎君、川上君。来なさい。君たちの望む原稿があるか探してみよう」

「あ、ありがとうございます！」

乱歩は最後のまんじゅうを手に取ると部屋を出た。廊下ですれ違った女中が

「先生、どちらへ」

と尋ねた。

「土蔵に行くってくる。このあと客人が来る予定はあったかね？」

「いや、ないと思います」

「じゃあしばらく誰も入れないでくれ。もし誰か来たら、応接間へ通しておきなさい。ただし官憲とアメリカ人は玄関もくぐらせではならない」

五十一歳の中年作家はうっすら笑っていた。

母屋である洋館の隣に、土蔵がある。

土蔵は乱歩にとって書斎であり、彼が収集した膨大な資料やコレクションを保管する倉庫でもあった。年季が入っている。

「入りなさい」

入口で靴を脱ぐと、目の前に階段がかけてあった。その左右には一階部分の入口があり、階段をのぼりながらちらと横を見ると、天井まである本棚がずらっと並んでいた。まるで古書店である。

「これはすごい」

川上の目が輝いている。

本棚には木の板が挿してあり、数字と細かな文字で資料の名前が書かれていた。乱歩は記録魔であった。膨大な資料の中からそのとき読みたいものを素早く発見できるように、彼は一々本棚に木の板をつけている。「そんなにおもしろいかね、ここが」

「はい！ 私は小さい頃から本屋に通うのが好きで、近所の個人経営の本屋に入り浸っていましたから、こういう本棚が密集している場所になると興奮するんです」

山崎も、川上が興奮している理由がわか

る。二人は本好きという点で共通しているのである。

一方で乱歩は本棚を探していた。

「たしか、このあたりにあったはずなのだが」

木の板を外すと、中には原稿用紙がいくつか束になって入っている。

「ああ、これだこれだ」

一束の原稿用紙をとり出した。束ねている紐をとき、原稿を広げる。

山崎と川上は、乱歩の背後から原稿を見た。いくつも朱筆で校正のあとがある。冒頭には黒字で大きく

あかつき草紙

と記してある。作者は「水野竜」。

「この原稿はどうかね。もう十五年も前になるが、私の友人だった水野君が書いたものだ。彼は寡作で世に出た作品はわずかであったが、この作品は唯一出版にまでこぎつけたものであった」

乱歩はいとおしそうに「水野竜」の文字を指でなぞった。

「私もこの作品は好きですね。江戸時代の遊

郭を舞台にした小説で、いわば艶本なのだが、ただ性的なだけではなくて心情描写がリアリステックなのだ。よく構成されている。だが、当局は心情描写など関係なしにこの本を発禁にしまった。本はことごとく押収され、私自身本屋を探し回ったがついに一冊も見つからなんだ。水野君は失意のうちに肺を病んで間もなく亡くなつてしまった。さぞ無念だったろうね」

乱歩はふと窓のほうに視線をやつた。山崎が来たときにはちらつく程度だった雪は、遠くが見えなくなるほどの吹雪になっている。

乱歩は振り返り、山崎に原稿の束を手渡した。原稿にしては百余枚というところが、意外な重さがあった。作者の魂が乗っていたのかもしれない。

「この原稿は水野君が亡くなる前に譲り受けたものだ。これを君たちに託そう。自由に使ってくれたまえ。もし無事出版できればそれ以上の幸いはないが、もし叶わずGHQの餌食になつても、きっと水野君は本望だろう」

山崎と川上は深く頭を下げた。

「原稿を貸してくださった先生と、この水野先生に報いるためにも、この出版は成功させます。そしてその先にあるエロ雑誌創刊の糧にいたします。出版が叶いましたら、必ずこの『あかつき草紙』をお返しいたしますから、それまでお借りいたします」

「いや、返さなくていい」

本棚に木の板を戻しながら乱歩は言った。「え？」

「返さなくていいと言っているのだよ。日本語は得意だろう？」

板を嵌めると、乱歩は着物の袖をぱらつと揺らし、本棚の森をゆつくりと進んだ。

二階の窓辺に西洋机があった。机の上には書きかけの原稿と、ランプと、黒電話が置いてある。着物の作家は机の前の椅子に腰を下ろし、くると二人の青年のほうを見た。

「昔、エロ・グロ・ナンセンスというものが流行った。卑猥なもの、残酷なもの、不条理なものがもてはやされ、人々は私の小説を担ぎ上げて『これぞエログロ』と祭の

ような騒ぎをやつた。その中の何人が私の作品の主題を考えただろう。私はそういう物のうわべだけをやたら称賛する文化運動は好まないが、今にして思えば、ああいうお祭りの中でこそ生まれた才能もあったのだ。だが治安維持法がすべて潰してしまつた。時代に便乗した未熟な才能も、時代を超越した匠も、一掃されてしまつたのだ」

掛けたまえ、と勧められた椅子に二人も座つた。

「私は名探偵でもなく、また予言者でもないが、もうじきあの頃と同じような喧騒が来るのではないかと予想している。グロとナンセンスはわからないが、エロ礼讃の空気が流れ込んでくるだろう。そのときが来たら、君たちは匠になりなさい。一過性で終わらないようなものを作つてごらんなさい。その原稿は、私からの期待の表れとして保管しておきなさい」

乱歩はそう言うのと、にやりと微笑んだ。山崎の体が震えた。腕に鳥肌が立った。これは冬の寒さではないだろう。

二人は重ねて乱歩に礼を言い、乱歩邸を

後にした。原稿は丁寧に風呂敷に包み、大切に山崎が抱えている。

「もうこれで半端なことではできないぞ。徹底的にエロをやらなきゃ」

「そうですね、山崎……山さん。僕も頑張ります。一緒に立派なエロ雑誌を創りましょう。そのためにも、まずはその原稿を本にしなきゃ」

「もちろんさ」

二人は吹雪で原稿が濡れないうちに、と急ぎ足で帰っていった。

さて、乱歩。

来客が帰ったあと乱歩は土蔵の二階にいた。椅子に腰を下ろしている。

ふと何かを思い出したように立ち上がり、土蔵の隅にある本棚の最上段から一冊の本をとり出した。本は、雑誌であった。本は薄っすらほこりを被り、乱歩はそれを親指で拭いた。表紙には『ばらいそ』と書いてある。

再び窓際の机にかけた。雑誌を机に乗せ、開くわけでもなく表紙を眺めている。

「あの男の話を聞いていたら、少し昔を思

い出した。君の顔が浮かんだのだ。君も昔、

『俺はエロ雑誌を創るんだ』と騒いでいたが、君にも彼の顔を見せてやりたかった。

君と彼とは、どこか似ているのだ。大袈裟ではない」

土蔵には、乱歩のほか誰もいない。独白は書物に吸い込まれ、誰も聞くことはできない。

「ただ、私は君の所在を知らないのだ。今、どこにいるのかね？ 私の知らない場所です。一体何をしているのかね？ 南原梅雨よ」

いよいよ『あかつき草紙』の出版の準備が始まった。

といっても、人手がない。山崎と川上の二人だけである。

そこで、山崎は印刷のための資金集めを、川上は印刷を請け負う会社との交渉を担当することにし、同時並行で準備を進めることになった。山崎は以前闇市でシケモクを売りさばっていたから商売のこつを素人なりに心得ていたし、川上は産報で働いて身に付けた交渉術が役立つと考えたのである。

資金繰りをするようになった山崎。その方法は、いかにもこの時代の金儲けである。

山崎には、突然の劇場退去で売り損ねたシケモクを大量に保管していた。早速それを闇市で売りさばき、多少の金を手に入れた。もちろん、この程度の金で出版ができるわけがない。

山崎はその金を元手に、米の取引をやろうとしている。

まず彼は、関東一帯の農村、それも外部から人がやってこないような僻地の村を巡り、米を安く買った。

僻地を選んだのは、当時すでに都市部の人間が食料を求めて農村に進出しつつあり、最初は哀れんで安く売っていた農家も金の味を覚えて売値を大きく引き上げつつあったからである。都市部からアクセスがしにくいほど、人間も情報も回ってこない。

取引の際、山崎はいくつかの工夫をした。服装は糊のきいた背広。川上の同僚の村岡が饞別に置いていったものである。ポケットには「農林省食料安定供給事務局員山崎耕作」と書かれた即席の名刺が何枚も

入っている。もちろんこれは嘘で、山崎は役人ではないし、食料安定供給事務局などという役職は存在しない。

山崎は農村特有の中央政府への恐怖感・畏敬を利用しようとしたのである。

「内閣総理大臣幣原喜重郎の要請で、米の買い上げに参りました」

と言ひ、名刺を配り、背広を見せびらかせば農家は快く米を売った。中にはお上が言うんだから、とただで米を譲った農家もあつた。

また、滑稽な出来事もあつた。

山崎が栃木へ米の買い付けに行つた際、駅へ行く戻り路を後ろから付いてくる者がいた。背丈は大きくないががっしりとした体つきの男で、顔つきに若干の幼さがあるところを見ると十四、十五歳くらいか。米の入つた袋を担ぐ山崎のあとを、どこまでも付いてくる。

(まさか……)

と思つたのは、この当時巷では農家に米を貰いにやつてきた女を狙つた強姦殺人事件が話題となつていたのである。

最初の事件はまだ戦争の終わらぬ一九四五年六月、東武鉄道新栃木駅で三十代の女が強姦のちに絞殺され、死体からは金品が剥ぎ取られていた。その後も関東一帯で同様の事件が多発し、警察は同一人物の犯行とみて捜査を続けていた。

(でも、俺は男だしなあ)

そうは思いながらも、尾行を続ける青年は不気味であり、しかも山崎の服装はいかにも金を持っていそうである。襲つて金を奪うくらいはするかもしれない。

背後を襲われるくらいなら、いっそそこから向き合つてやろうと、山崎は後ろを振り返つた。しかし青年は山崎が振り返るや足を速めてきた。しかも満面の笑みなのである。

「代議士さん、代議士さあん！」

青年は山崎のもとまで駆け寄ると、地面に顔をこすりつけた。

「おら、その村の農家のせがれ、小松五郎でございます。あなたは代議士さんでございますいしょ？」

山崎はいきなりのことにご迷惑したが、身

なりがたしかに代議士のそれである。ここで狼狽しては農林省食料安定供給事務局員ではないと疑われ、せつかくの米を奪われるかもしれない。

「お、おほん。いかにも私は代議士だが」
仰々しく咳ばらいをし、ネクタイを締め直した。いかにも喜劇の代議士がやりそうな仕草である。しかし小松は信じたよう目で輝かせながら

「おら餓鬼んちよの頃から東京に出て代議士さなりてえと思つてました。今日こうして先生とお会いできたのは神様の助けだと思つとります。どうかおらを先生の弟子にしてくれねえでしよか？」

(面倒くさいことになつたな)

山崎がこの男の対処に悩んでいる間も、小松は田舎言葉を駆使しながら

「おら何でもするだよ。野良仕事してつから力持ちだし、野っばら走つてるもんで足も速い。漢字も書けるし、それから算数も学校で勉強したし……」

と売り込んでくる。

こういう男は、無理に引き離そうとすれ

ばするほど執拗に付いてくる。自家発電した情熱が思考の一部分を占領しきっている以上、無理に止めてしまうと後々面倒なことになるのである。

山崎はポケットから例の名刺を取り出した。再び「おほん」と咳ばらいをした。

「君の代議士になりたいという大志はよくわかった。その情熱を無下にするにはできない。そこで、君にこの名刺を渡しておこう。もし君が本気ならば、一度家に戻って親御さんを説得し然るべき支度をしたうえで、名刺にある住所に来なさい。そこに私の事務所がある」

小松は山崎から名刺を受け取ると、大粒の涙をぼろぼろ流しながら

「ありがとうございます、ありがとうございます、ありがとうございます」

と低頭した。

「君の来訪を待っている」

ぼん、と小松の肩を叩き、山崎は駅に向かって歩き始めた。

「山崎先生、必ずおらは先生の弟子になるだよ！ 必ず！」

背後から小松の声が聞こえた。

名刺に書いてある住所は、現在山崎が拠点にしているアパートの住所ではない。今頃は解体されているであろう、有楽町の劇場の住所である。だから小松がこの住所を目指してきたとしても山崎と出会うことはないのである。

このときのことを後に話したところ、隣にいた川上は山崎の腕を強く抓った。川上はこういう健気な青年の行動に弱い。

話が少し脇道に入りかけた感がある。

紆余曲折ありながら、山崎は農村で相当量の米の購入に成功した。あとは簡単である。手に入れた米を東京の闇市で売りさばくと、たちまち人々がとびついた。当時の帝都東京は涙が出るほどの食糧難であった。米はおろか、一本の芋を手に入れるのさえ難しい。山崎の米はまさに天の助けであった。値段は正規価格の何倍も高いが、皆米の輝きに目が眩んでいる。

かくして山崎はシケモクから米、そして金のわらしべ長者で見事印刷費を手に入れて見せた。

一方の川上一。

川上の強みは何といっても産報時代に築いた出版関係者とのパイプである。印刷会社とは機関誌発行作業のなかでつながりが出来ている。

今回もその印刷会社と交渉をしようという算段であった。

しかし、結果は散々であった。あれほど強い結びつきがあった印刷会社がどこも首を横に振る。

川上は少々お人よしなところがあった。友情や信頼関係はそうそう崩れるものではないと信じている。だが現実の社会はずつと冷酷であった。産報からの依頼とあつてはすぐに印刷に取り掛かる彼らだったが、今の川上は産報の人間ではない。外様の人間である。

そのうえ、印刷会社はこの頃GHQが発行するパンフレットやチラシの印刷依頼を受けており、とても民間組織の艶本の印刷に回す人手がなかった。そこに戦時中から続く慢性的な紙不足が重なっている。

交渉を得意とする川上も、交渉以前の段

階で断られてしまつては能力を發揮することができなかつた。

山崎が二週間ぶりにアパートに戻つた日、川上はひとり自室でうなだれていた。

「おうハジメちゃん、こつちは金の準備ができたぞ。俺はどうやら商売の才があるらしい。シケモクを売つて米を買い、それを闇市で売つたらこんだけの金になつた。おほほ、金儲けつてのは案外楽しいな。ハジメちゃんはどうよ、印刷所見つかつた？」

ハジメは俯いたまま答えた。

「どこもだめだ。僕たちみたいにどこの馬の骨かもわからないようなやつのために働くほど暇じゃないって」

「そうか……」

山崎はポケットから「朝日」の箱を取り出し、一本を川上に渡した。川上は普段煙草を吸わないが、このときは吸わないと落ち着けなかつたらしい。細い煙がのぼつた。

「ガリ版で刷るわけにもいかないしな」

あくまでも二人は、しつかりと印刷所を通して本を出したいのである。乱歩や水野竜への申し訳なさもあるが、ガリ版刷りだ

と本屋に置けないので流通しにくくなる。

アパートの一室、男二匹あぐら組み。しばらく考えたが、策が浮かばない。

日が暮れた。

アパートの外から、豆腐売りのチャルメラが聞こえてきた。

「腹が減つてちや、出るはずの名案も出てこないよな。とりあえず飯にしようぜ。米は闇市に売つた残りがあつた。そこに豆腐でも乗つけてさ」

冬の盛りである。雪はないが防寒着を着なければすぐに肌の色が抜ける。心なしかチャルメラの音も震えている。

山崎は豆腐を二丁買った。髪の毛の薄いおやじが水に沈む豆腐をすくつていると、屋台の上がバラバラと騒がしい。

「ありや、アメリカさんの飛行機かねえ。日本の飛行機じゃないなあ。音が重うございますからねえ」

山崎と川上も空を見上げて見るが、果てしなく広がる暗闇の中にトンボの目のようなライトが光っている他は何も見えない。音の聞こえ方からして、飛行機はちょうど

真上を飛んでいるらしい。

「最近空を飛ぶのもアメリカさんのばかりで、日本のはめつきり見なくなつた」

「日本の飛行機はみんな太平洋の藻屑だよ、おやじさん」

太平洋の惨状は、大陸にいた山崎の耳にも届いていた。

飛行機の音は次第に遠ざかつて、やがて聞こえなくなつた。

「はいお待ちどう」と、屋台のおやじが豆腐を二丁、鍋の中に入れて川上に渡した。

帰り道、山崎は先ほどの飛行機について色々考えていた。

「ハジメちゃん、俺はずつと病院で働いてたから飛行機については門外漢なんだけだよ、日本の飛行機が飛ばなくなつた今、飛行機会社の連中はどうやって金を稼いでいるのかね」

「どうなんだろう。自分も航空産業についてはよくわからないけど、日本軍は武装解除されてるっていうし、このご時世だと日本の飛行機をしょつちゅう飛ばすつてわけにもいかないだろうからね」

「ふうん。飛行機会社も万事休すつてことか。日本人はみんなで貧乏になりますよつてことね」

道に落ちている石ころを蹴つ飛ばした。

小石はアパートの塀に当たるとおかしな方向に跳ね返った。

そのとき、山崎は天啓ともいうべき妙案を思いついた。

「待てよ、飛行機会社の連中つてのはみんながみんなトンカチやナットを握つて工作をしているわけじゃないよな。事務仕事をするやつだつているはずだ。つてことはその事務仕事をするやつらが使う書類やなんかの印刷を請け負う場所もある。大きい飛行機会社だつたら子会社として印刷所を持つてるところもあるはずだけど、飛行機産業が停止している今は印刷所だつて仕事をなくしているよな。ハジメちゃん、そこをあたつたらどうだ？」

山崎という男の強みはここにある。人が見向きもしない情報や物事から、状況を打開する策を思いつくことができる発想力が彼の武器であつたし、その点は経験と知識

をもつ川上も及ばない。一方で川上は無数の情報から適当なものを引き出す点で山崎より優れていた。

山崎の言葉を聞いて、俯いていた川上の顔がにわかに光を得た。

「なるほど、飛行機会社の印刷所に掛け合うつてことね！ たしかに飛行機会社が仕事をなくしているなら印刷所だつて閑古鳥が鳴いている。僕たちみたいにとこの馬の骨かもわからない人間の注文も受けてくれるかもしれない。明日、知っている日公儀会社を訪ねてみるよ」

翌日、川上は早速いくつかの飛行機会社に向かい、印刷所が利用できるかを聞き込んだ。

すると、一社見つかった。嶋中飛行機株式会社の子会社である印刷会社「行進社」である。

嶋中飛行機株式会社は一九一六年に設立された飛行機研究所兼製造会社で、創業者嶋中知久蔵は巧みな交渉術で軍関係者とのパイプを構築し自社の飛行機を売り込むことに成功した。嶋中知久蔵はアメリカ・フ

ランスへの留学で機体製作・整備技術を学んだ技術者でもあつた。自らも開発に携わり、嶋中飛行機は太平洋戦争における軍用機製造の大手となつた。

しかし終戦を迎えると軍という取引先を失つた嶋中飛行機は急速に勢いを失つた。不幸なことに東京大空襲で主要な工場すら失つており、そこにGHQの圧力が加わつていつ会社が倒産してもおかしくない状況であつた。

嶋中飛行機直轄の印刷所として書類や伝票を印刷していた行進社もまた、この時すでに廃業の二文字が議題に上がり始めていた。社長の佐川大(さがわまさる)は業務に対する誠実さで親会社の信頼を得ていたが、この窮地に手を打つことができず蠟燭の火が消える時を怯えて待つことしかできなかった。今年一九四六年で五十三歳。妻と三人の子どもがいる。

そこに川上が来た。川上は出迎えた佐川の顔がひどくくたびれているのを目見て(この会社ならいける)

と確信した。

交渉は難なく終わった。川上はこの注文は「御社のためでもある」ということを言葉の中にさりげなく混ぜた。それが目の前の肥満した中年の心を掴んだらしい。

「準備が出来次第、すぐに印刷に取り掛かります」

佐川は川上の手を強く握った。両者の手がうっすら汗ばんでいた。

川上がアパートに戻ると、山崎は部屋で腕組をして立っていた。視線の先には半紙と硯が置いてある。

「ハジメちゃん、待ってたよ。上手くいったんだろう？」

「うん、上手くいった」

山崎の声の調子はあくまでも落ち着いている。川上の凱旋を既に予想していたらしい。

「よし、明日から本格的に出版の準備だ。」

その前に、会社名を決めない」と

「そうだね。会社名を決めないと奥付が空っぽになっちゃうね」

「さて、どんな名前にしようか」

川上も山崎と一緒に腕組をして考え始めた。もしこの様子を傍から見ている者がいたなら、二人を力士像か何かと見間違えるかもしれない。

ここで決めた社名は『あかつき草紙』の出版だけでなく、その後のエロ雑誌の出版でも用いられるだろう。半紙に書かれた文字が、社の命運を左右しうる。そう思うと彼らの表情が険しくなるのも仕方がない。

しかし、なかなか案が思い浮かばない。

そもそも二人には名前を付ける、という経験がないのである。ふたりともまだ独身で子どももいなかった。平均的な初婚年齢が二十五歳前後だったという時代である。子どもの名前も考えたことがない人間が容易に社名を決められるはずがない。

しばらくして、川上が腕組を解いた。

「山さん。これ以上黙って考えていても浮かばないよ」

「そうだな。まったく、名前をつけるって

のはこんなに難しいんだな。がきの頃はかぶと虫の名前なんてすぐ思いついたのに」

「かぶと虫！ なつかしいなあ。あの頃は

とくに悩みもせず「大将」とか「かぶ公」とか付けてたなあ。案外力を入れずに考えた名前が良かったりするかもね」

「うむむ。それじゃあやってみるかあ」

一度目を閉じ、かっと見開いた。窓にやもりが張り付いているのが見えた。山崎はそれを指さし、

「家守社はどうだ！」

と一声。

「家守社……、それはちょっと」

川上は苦笑した。

「もし他にカラス社なんて名前の出版社があったら食べられちゃいそうだ。でも、目についたものを名前に入れていくのはいいかもしれない」

二人は自分の手荷物を床に広げ、何か社名に使えそうなものがないか探してみた。

消しゴム社。眼鏡書房。手ぬぐい出版。

蝦蟇口書店。名刺社。手帖書院——

どれも微妙な響きである。

ふと山崎は川上の鞆の中の原稿に目があった。交渉のために印刷所に持って行った『あかつき草紙』の原稿である。山崎はそ

れを手に取り

「暁書房、なんてどうだろう」

と言った。

『あかつき草紙』だから暁書房？」

「そうそう。でも『あかつき草紙』を出版するからこの名前にするってわけじゃない。あかつきは夜が明けて昇る太陽。戦争という日本の夜中が終わったことを告げる太陽のような会社っていう意味もある。縁起も良さそうだろ？」

「うん、良い案だ！ 平井先生と水野先生への感謝の意味も込めてあるしね。よし、暁書房でいこう。僕たちは暁書房だ！」

筆にたつぷりと墨汁をしみこませ、床の半紙に大きく

暁書房

と書いた。山崎の達筆である。しばらく乾かしてから山崎の部屋に貼り付けた。何の変哲もないアパートの一室が、紙一枚でぐっと引き締まったように見える。

暁書房。これがのちに戦後日本を大きく掻き回すことになる会社の、日の出であった。

一九四六年三月一日、暁書房は『あかつき草紙』を出版した。

本の奥付には以下のように書かれている。

——一九四六年三月一日発行、著者…水野竜、発行者…山崎耕作、発行所…暁書房、印刷…行進社

行進社社長 佐川大から完成したばかりの本を受け取ると、山崎の表情が綻んだ。隣の川上はすでに目が赤くなっている。

「すべて注文通りにいたしました。落丁本は一冊もないはずです。社員全員で確認をいたしました。本当に暁書房さんには助かりました。最近の仕事もめつきり減ってしまい、どうなるかと思いましたが、首の皮一枚つながりました。普段は書類や伝票なんかを印刷してらんですが、小説の印刷もいいですねえ」

佐川は慇懃に何度も頭を下げた。借りてきたトラックに本の入った箱を六

つ載せ、早速書店に売り込みに行った。立ち上げたばかりの暁書房は、まだ取次(問屋)とのつながりがないため、直接書店と交

渉をするしかない。

「さあ、ここからがまた大変だ」

「最悪この本屋も受け取らなかつたら、自分たちで配るしかないな。せつかくのい本だからなるべく多くの人に届けたいんだけど」

「紙はあれだけどね」

「それはしょうがないだろ。ただでさえ紙不足なんだ、仙花紙が手に入っただけ運がよかつた」

今回の出版では、川上が産報から横取りした上質印刷用紙は一枚も使っていない。粗悪な「仙花紙」を使用している。上質紙をエロ雑誌の印刷に充てるためである。

「良い食材は、良い料理のために使うものさ」

トラックは東京を駆けまわった。

交渉に向かった書店はどこも川上の知り合いの店であった。山崎は相棒の交友の広さに驚かされた。

交渉は、おそろしいほど上手く進んだ。交渉をした店の多くが『あかつき草紙』を受け取り、

「さつそく店頭に並べよう」

と言った。山崎は交渉の席でこっそり隠し包丁を仕込んでいた。作者の水野竜について語るのである。すなわち、この本は水野竜という作家が書き上げた傑作にも関わらず、当局の検閲によって発禁処分になり作者は嘆きのうちに早逝した、云々。もちろんこれは江戸川乱歩から聞いた話だが、書店主たちはまんまとこの話に心を動かされた。彼らもまた戦前戦中の出版規制に泣かされてきた人間であった。

トラックの積み荷は次々に売られていった。気づけば残りは三店舗分にまでなっていた。

「コーさん、ちよつと寄りたい本屋があるんだけど」

ハンドルを握りながら川上が言った。運転免許を持っていない山崎は助手席で「朝日」に火を点けようとしていた。

「右折しようが左折しようがハジメちゃんの気の向くままだぜ」

ある一軒の本屋に辿り着いた。
麻布十番の裏通りにひっそりと佇んでい

る寂れた書店であった。「遊戯堂書店」という看板がかけられている。

トラックが店の前に停まると、川上は看板に一瞥を投げて店の中に入っていった。その視線がやわらかかった。

(馴染みの店なのかもしれない)

と山崎は見抜いた。

腰の曲がった店主が本棚にはたきをかけていた。川上はその老店主に挨拶をすると「お久しぶりです、斎藤さん」

老店主は動かしていた手を止めて、若い来訪者の顔をまじまじと眺めた。それから驚いたように

「おお、君は川上少年だね！」

と言った。

「わしはこの頃物覚えが悪くなったが、君の顔はまだ忘れられないみたいだ。なんせ毎日のようにここで立ち読みをしていた子だからね！」

「コーさん紹介します。この方は僕が学生だった頃にお世話になった本屋の斎藤さんです」

山崎が会釈をすると、斎藤は先ほど川上

にしたようにまじまじと山崎の顔を眺めた。斎藤店主は極度の近視であった。

「この人は川上君の仕事仲間かい？」

「はい、一緒に仕事をしています。言わば……」

川上がちらと山崎の顔を見た。

「……相棒です！」

「そうかいそうかい、川上君にもようやく相棒が出来たか！ あなたは山崎さんだったね。川上君は学生だった頃ひとりこの店に来ては本を読んでいてね、一度も友達を連れてきたことがなかったんだ。だからわしは言った。『本の世界の友人とおしゃべりをするもいいが、人間として生きていくならば現実の友人のひとりも作らなきゃならん。それも、相棒と呼べるような友人をな』とな。だから山崎さん、あなたが相棒だと聞いてわしはとても嬉しいよ。ありがとう。これからも彼を支えてやっておくれ」

「いえいえ、僕のほうがハジ……川上君に助けてもらっているんですよ」

それから斎藤老人は若い頃の川上について語った。

学生時代の川上は金がなかった。両親は食堂を経営していたが、客を思つて安値で商売をしていたせいで一家はいつまでも貧乏であつた。

本が好きな川上は周りの級友のように本を買う金がなかった。それでいつも放課後になると遊戯堂書店にやつてきて本を立ち読みしていたのだつた。最初ははたきを片手に追い出していた斎藤だつたが、川上の家の事情を知つて店の本を自由に読ませてやることにしたのである。

「棚の前で立ち読みされると真似をするやつが出てくるから、帳場にいるわしの傍で読ませたんだ。いつも学校から走ってくるから、ほんのり汗のおいがしてね」

つい三か月前に川上と知り合つた山崎は、もちろん彼の過去を知らない。しかし斎藤の話の聞いていると、当時の川上の姿がありありと目に浮かんでくるようだつた。今もすぐその書棚で本を選んでゐる川上青年がゐるかもしれない。

「でも、今日は思い出話をしに来たんじやないんですよ。僕たちで作つた本をお店に

置いてもらおうと思つて来たんです」

「ほお、本」

川上は斎藤に『あかつき草紙』を手渡した。斎藤はページをばらばらとめくりながら「ほう」「ふむ」と漏らした。

「実にちゃんとした本だね。これは君たちが作つたのか、たいしたものだ」

店主は川上の頭をわしやわしやと撫でた。「よし。この本をわしの店に置こう。小さい本屋だ、どれくらい売り上げに貢献できるかわからないがね」

「ありがとうございます！」

山崎は老店主の手を強く握つた。角ばつた岩の表面のような手であつた。

店の中に商品を搬入するべくトラックの荷台から箱を下ろしていると、それを眺めていた斎藤がふと

「君たちはこの後も本を売りに行くつもりかい？」

と尋ねた。

「ええ。あとひと箱ですから、数軒と交渉をしたら全部掃けますね。最初は六つの箱があつたんですが、どこの書店も親切だつ

たので残りはこれだけです」

「そうか……」

斎藤はそれを聞くと表情を曇らせた。「待ちなさい」

箱を抱えて荷台から降りようとする山崎を斎藤がとめた。

「やはりその本を買うのはやめよう」

「え、どうしてですか」

傍にいた川上が斎藤に駆け寄る。

「置いてくれると言つてくださつたじゃないですか。商品に何か不備がありましたか。それとも何か失礼なことを……」

「いや、そういうわけじゃないんだ。君たち、さつき聞いたところによると、この本はなるべく多くの人の手に渡つてほしいと言つていたね。そのことを考えたときに、果たしてうちの店が君たちの本を売るに値する店なのだろうかと疑問に思つたのさ。

うちの店をご覧の通り裏通りでひっそりと営んでいる、建物が小さく客足もそんなに多いわけではない零細書店だ。わしも君たちの本を扱いたい気持ちは山々だ。しかも息子のように可愛がつていた川上君が、初

めてできた相棒と作った本だというじゃないか。でも、君たちの目的を考えるとやはりうちの店は適していない。『あかつき草紙』は、もつと人のいる場所で売ったほうがいいよ」

「そんな、このお店だって立派ですよ」

「お世辞はいいんだ。ここはわしの店、わしが長年根城にしてきた店だから、わし自身がいちばんわかるんだ。他の店に比べていささか地味だったことも、本当は認めたくないが事実なんだ」

川上は返す言葉が見つからなかった。

川上は『あかつき草紙』を出すことが決まってから、この書店に本を置きたいと思っていたのである。青年時代に世話になったこの店に本を置くことで、自分が立派になったことを店主に見せたかった。

斎藤店主の言う通り、この書店はこじんまりとした店で客足が少ない。それは川上も知っている。学生時代に帳場で本を読んでいたときも、客はほとんど来ていなかった。それでも、川上はこの店に『あかつき草紙』を置きたかった。

「それでもこの店で売って欲しいんです」という言葉が喉から飛び出すすんでのところで肩に山崎の手が乗った。

「ハジメ、ここは諦めよう。おやじさんの言ってることが正しい」

山崎に言われてしまつては、もう引き返すしかなかった。

「申し訳ありません。斎藤さんの助言に従つて、別の本屋で売ることにします。ありがとうございます」

川上は一礼するとトラックに戻つていった。箱を抱えた山崎も荷台に下ろして縄で固定を始めた。

運転席に戻つた川上は、店主と顔を合わせるのも気まずいように思つて俯いていた。（コーさんや斎藤さんの言うことは正しい。正しい、けれども——）

「けれども」の先の言葉が出てこない。すべて正しさに吸収されていく。

そのとき、トラックのドアを斎藤が叩いた。

「ちよつと」

トラックから降りた川上の頭の上に、斎

藤は手を置いた。背の高さを測っているらしい。

「身長が伸びたなあ。だいぶ背が大きくなつたろう」

斎藤の手が川上の頭をやさしく撫で始めた。

「嬉しかったなあ、いつもひとりで立ち読みしていた君が仲間と一緒に本を出すようになるなんてなあ。あの頃のわしには想像ができなかった。大きくなった、ほんとうに大きくなった。わしは大きくなった君の姿を見ただけで嬉しいんだよ。君がこんなに素敵な青年に成長して、わしは嬉しいよ」

店主はにこやかに、青年の頭を撫で続けた。川上の視界がぼやける。店主の顔を見ることができずに俯いているため、涙は眼鏡のレンズに滴った。

「いつかお金に余裕が出来て、わしの店にも置けるくらい沢山の本を出版したら、またおいで。そのときはもう拒むまいよ」

「……斎藤さん、必ずまた、来ます」

トラックから山崎が呼んでいる。

川上は店主に頭を下げると、涙で濡れたレンズをシャツで拭いて、運転席に乗り込んだ。エンジン音が低く聞こえてくる。

「おうい、と齋藤が呼んだ。」

「君たち、このあと本屋巡りをするのかい」

「はい、そのつもりです」

「このあたりの本屋はどこも小さくて、うちとそんなに変わらない。もし本を売りさばきたいなら、新宿マーケットに行ってみるといい」

「新宿マーケット？」

「新宿にある闇市だ。今日本で最も大規模なヤミの取引場だ。あそこには関東一帯から物資と人間が集まる。そこで屋台を出せば、本屋にものを売り込むよりずっと早く多くの人間に売れるぞ」

「わかりました、行ってきます！」

川上はアクセルを踏んだ。

山崎は店の前で齋藤が手を振っているのを見た。

「振り返さなくていいのか？」

川上は赤く腫らした目で

「うん、いいんだ」

と言った。

しかし裏通りを抜けるところでがまんが出来ずに窓から振り返った。齋藤はもう店に戻ったようだった。それを川上は店主の気遣いだと思った。もしこのとき店主がまだ店の前に出ていたら、川上はたまたまなくなって引き返していただろう。

山崎はすでに新宿のことを考えている。

「よし、新宿マーケットに行くぞ。どれだけ賑わっているのか、一回この目で見てみたいいな。新宿に着くまでには泣き止めよ。涙のせいで事故を起こされちゃたまらないからな！」

「うるさい！ 僕は泣き虫じゃないぞ」

川上は精一杯強がってみせたが、油断するとまた涙が溢れてきた。

次の話に入る前に、少し時間をいただきたい。今更ではあるが、闇市というものもそもそも何なのかを話しておかなければならない。

闇市は政府の経済統制で禁止された物流

ルートを通ってきた物資、通称「ヤミ」を扱う市場のことで、闇市誕生のきっかけは一九三九年に国家総動員法のひとつとして定められた価格等統制令である。日本では配給という形で国民に物資を分配していたが、戦局が悪化するに従い物資が行き渡らなくなっていくた。その代わりに流通するようになったのがヤミである。中央物価統制協力会議の報告によれば、一九四三年から一九四五年の間で判明しているだけでも二二九四件の闇取引が行なわれていたそうだが、これは氷山の一角に過ぎないだろう。

しかしこうした闇取引は「市場」という目に見える形ではなく、あくまで闇ルートを用いた暗黙の取引であった。そのためヤミを手に入れるためには、まず闇ルートとつながりを持つ必要があった。誰もが取引を出来る市場「闇市」が登場するのは大東亜戦争終盤になってからである。

一九四五年八月十五日、終戦。

その五日後、国民がまだ敗戦の報に打ちひしがれている中、とある街区に異変が起きていた。東京都淀橋区(現新宿区)新宿駅

東口一帯に闇市が出現したのである。「新宿マーケット」と呼ばれたこの闇市は、的屋系暴力団「関東尾津組」によって設立された。

元々新宿駅付近は四つの暴力団のナワバリであった。彼らは祭礼の時期になると的屋(てきや。屋台のこと)を出してその売り上げを収入としていたが、戦時中は闇取引の管理や防空壕の建設など様々な事業を行っていた。関東尾津組はこうした社会事業を通じて淀橋区管轄淀橋警察署とつながりを築いていた。

八月十五日、尾津組は自由市場設立のため、淀橋警察署署長 安方四郎(やすかたしろう)に新宿駅東口一帯の土地の租借を依頼。既に社会事業によって信頼を獲得していた尾津組は租借権を手に入れ、急ピッチでの屋の準備を開始した(元々私有地であったため、あくまでも租借なのである)。そして八月二十日、関東尾津組は「新宿マーケット」を設立。この日の新聞各紙にはマーケット開始を宣伝する広告が掲載された。

光は新宿マーケットより

転換工場並びに企業家に急告！ 平和産業の転換は勿論、其の出来上がり製品は当方自発の「適正価格」で大量引受けに応ず。希望者は見本及び工場原価見積書を持参至急来談あれ。

淀橋区角筈一の八六五

(瓜生邸跡)新宿マーケット 関東尾津組

こうして工場製品を中心のマーケットとしてスタートした新宿マーケットは次々に規模を拡大していき、八月の終わりには数百もの的屋が新宿一帯に出現したのである。新宿マーケットは東京最大の闇市となった。山崎はこれまでに闇市を見たことも利用したこともあった。有楽町で浮浪者同然の生活をしていたときはガード下の小規模な闇市に出入りしていたし、『あかつき草紙』印刷のための資金も東京中の闇市を巡って稼いだものだった。

しかし、新宿マーケットだけは来たことがなかった。時々風に乗って、黒い噂が流

れてくるからであった。

トラックを降りた山崎と川上が圧倒されたのはその人の多さである。

「新宿マーケット 関東尾津組」と大書された看板を通り過ぎると、その先はおそろしいまでの人の群れであった。道の両側には露天商が的屋を出していて、その一軒一軒の前に人が集まっているのである。服装はカーキ色の国民服やもんぺがほとんどであった。

群衆に押し合いへし合いされながら山崎と川上は見て、そして聞いた。

国民服。半長靴。バンド。眼鏡。薄汚れた背広。箆笥から出した呉服。セーラー服。日本軍兵士の鉄兜を加工した鍋、フライパン。先割れスプーン。ばら売りの箸。かけた皿、三枚ひとまとめ。米。麦。甘藷。馬鈴薯。コオロギ。蒸しパン。黒パン。飴湯。汁粉。日本酒。どぶろく。カストリ。バクダン。鱈。目刺し。牛肉缶。トマトスープ缶。チーズ。ガム。チョコレート。朝日。ゴールデンバット。櫛。髪留め。香水。ヒロポン。モルヒネ。ドス。ピストル。その

弾。

日用品から衣料、薬、食料品、武器弾薬まで、あらゆる商品が屋台や筵の上で売られている。街路に溢れるのは群衆のざわめき、的屋の啖呵、野良犬の遠吠え、ホイッスル、怒鳴り声はおそらく万引き小僧に向けられたもの。

「とんでもない場所だな、ハジメ」

「すれ違ふときにぶつかつても、誰にも何も言わないんですね」

「そんなこと気にしてられないのさ」

新宿東口に集中する人間のエネルギーを感じながら、山崎はこの場所で商売をしたらずぐに在庫がなくなるだろうと思つた。ここにはあらゆる欲望が集まっている。食欲、物欲、そして性欲も満ちているはずだ。(なんとしても)『あかつき草紙』を売るぞ。そのためにまずは売る場所を見つけねえと)

どこもかしこも筵や屋台があり、先客の商人たちがいた。山崎はもみくちゃにされながら、商売の場所を探していた。

すると、電信柱のそばにわずかな空間が

あるのを見つけた。

「ハジメちゃん、あそこだ！ 電信柱のそばが空いてるぞ！」

人を押しつけ押しのけ、山崎と川上はすべり込んだ。

隣では木箱に腰かけた青年が、何やら薬を売っている。

「すいません、ここ、空いていますか」

青年は突然やってきた二人組に当惑しながら「ええ」と言つた。山崎と川上はすぐさま持つてきていた筵を敷いた。

『あかつき草紙』は残り二十冊。箱の中にあつた在庫分が十五冊で、予備として持つてきていたのが五冊である。リュックサックを開けて、筵に並べて置いた。

「さあ、始めよう」

山崎の声は群衆の喧騒にかき消されたが、川上はその意味を察した。

「さあさあお立合い！ 戦中の動乱の中に消えた幻の小説が堂々復活ですよ。水野竜『あかつき草紙』！ 若くして亡くなった作家の名作だよ、『あかつき草紙』ですよ！ さあさあ一冊八円ですよ！」

川上の声はどこか細く、隣の山崎がようやく聞こえるほどであつた。声の出し方も、どこか恥じらつているところがある。目の前を通つていく人間は多いが誰も川上のほうを見向きもしなかつた。無理もない、これが川上にとつて初めての売り子体験なのだ。

「ハジメこの馬鹿！ そんな女々しい声で本が売れるかよ。もつと腹から声を出さなきゃ。つていうか客相手に『ですよ』だなんて呼びかけるやつがあるか」

山崎は立ち上がると

「はいはいはい、『あかつき草紙』だよ『あかつき草紙』！ 新作のエロ小説だよ寄つておいで！ 一冊八円だぜ、七円でもいい！ ほら、買った買った」

山崎は川上よりも声が大きくよく通る。人々もその声のする方へ振り向いた。だが、それで終わりだつた。誰も筵の前にやつてくる者はいない。山崎はその後も大声を張り続けるが、時間ばかりが増えていった。「なんだよ畜生、誰も俺たちに興味がないつていうのかよ。こつちを見はするが全員

シカトだ、畜生め」

ふと隣の薬売りを見ると、二人の客が商品を眺めている。

「これはアメリカからきた上物のビタミン剤です。今なら二十五円でいいですよ。どうですか」

売り子の青年は客に耳打ちするようにそう言う。すると客はポケットから札を出して、薬を一気にまとめ買いしてしまつた。

「見たかハジメ。隣の小僧、一気に商品を売りさばいてつたぞ。俺たちより全然声が小っちゃいってのに、どうしてあんなに売れるのかね」

「コーさん、あれはただの薬じゃないよ」

「知ってるぜ、アメ公が持つてきたビタミン剤だろ？」

「違う違う。あれはメタンフェタミン、覚醒剤だよ。使うと二晩寝れずに働き続けられるって魔法の薬だよ」

「けっ、だから呼び込みをしなくても客がやって来るってわけか。でも俺たちは麻薬売ってんじゃないえ。エロ本を売ってんだ。

こっちから呼び込まなきゃ客はやって来ね

え。くそう、どうすれば客が来るんだろうなあ。なんかいい方法ねえかなあ」

書店であれだけ受け取ってもらえた本が、これだけ人のいる闇市で一冊も売れないはずがない。山崎は確信していた。となれば、問題は売り方にある。だが山崎も川上も大勢の前で商売をした経験がなかった。

「くそ、どうしたら客を呼び寄せられんだ！」

そのとき、近くから

「この野郎！」

と叫ぶ声があった。人間の視線が一斉に声のほうを向いた。その周辺だけ一瞬、沈黙が生まれた。

そのあとで女のかん高い悲鳴が響いてきた。

「何が起こつた？」

すぐにわかつた。喧嘩が起きたのである。

二人の男が殴り合つていた。男は二人とも同じくらしいの背格好で、片方は三十歳、もう片方は二十歳そこらであった。男たちは互いに怒鳴りながら頬を殴つていた。

男たちを中心に人々が離れていった。ド

ーナツ状の空間が生じた。真ん中で殴り合う男二人。

山崎も飛び出してその輪の中に加わつた。「何が起きたんだ」

山崎の隣にいた、ふくよかな顔をした女が

「あの年とつたほうの人が若い人の足につまづいて転んだんだよ。わざとじゃないでしょうけど、『転ばしやがったな、この野郎』って言つて若い人のほつぺたを張つたのさ。そしたら向こうも『やりやがったな』って言つてさ。それであれだよ。まったく、良い年した男が情けないねえ。子どもじゃあるまいしねえ」

と言つた。

そうしている間も、男たちは悪罵とともに互いを殴り続けている。それを眺めている野次馬たちは田になつて二人を囲んでいるため、まるで街頭プロレスをしているように見える。人々は片方が殴られるたびに叫んだ。悲鳴ではなく、興奮の叫びであった。

「おう、やっちなえ！ 負けるな！」

と応援をしている者もいる。新宿の一角で始まったプロレスに、たまたま通りかかっただけの人間たちが熱狂していた。山崎だけがひとり

(いいなあ、あんだだけ人が見てくれてりや観覧料をとれるかもしれねえな)

と考えていた。

——ん、観覧料？

閃きというのは、いつやってくるかわからないからこそ「閃き」というのだろう。

山崎はこの熱気の中でひとつのアイデアを思い付いた。

「ハジメちゃん、リュックサックにありったけの本を詰めて寄越してくれ」

「どうしたの、もう帰るっていうの？」

「ちよつとそこで、金かせいでくる」

川上は訳がわからなかったが、山崎の言う通り『あかつき草紙』をリュックサックいっぱい詰めた。それを受け取った山崎は、リュックサックを背負って再び野次馬の群れの中に飛び込んでいった。

(コーさん、一体何をするつもりなんだろう?)

山崎は群れの中に入ると、中心に向かって進んだ。

「どいてくれ、どいてくれ！」

やがて野次馬の群れを脱出し、二人の男が今も格闘を続けている場に飛び出していた。

「やめい、やめねえかあ！」

人々の視線、それから円の中心の格闘者の視線が山崎に注がれた。

「何をこんな場所で殴り合ってるんだ！お前らは馬鹿か、いや紛れもない馬鹿だな。

馬鹿っ！お前らがポカポカやってるせいで道路が塞がれちまってるんだ。見てみる周りを！

おかげでこんなに野次馬どもが集まっちゃった。おい野次馬ども、お前らも漏れなく馬鹿者だぞ。野次馬の『馬』は馬

鹿者の『馬』とはご先祖様もよく言ったもんだぜ！」

最初はぼかんとしていた二人の顔にだんだんとしわが寄ってきた。歯軋りの音が山崎にも聞こえた。二人だけではない。「馬鹿者」と罵られた野次馬たちも、内心には少しずつ怒りが蓄積されていた。

そしてついに、男二人のうち年の若いほうが山崎に殴り掛かった。山崎は飛んできた拳をさらりと交わした。拳骨は大陸にいた頃に上官から何度も受けている。上官は当時こそ病院勤務だったが、シベリア出兵に参加したこともある男だったからその拳骨は凄まじかった。それに比べれば、たかが足が引つかかった程度で殴り合いをしている男の拳なぞ屁でもない。

殴り掛かった男はバランスを失って顔から地面に激突した。

「ありやりや」

と山崎。

「まったく情けねえやな。おとっさんおつかさんに手塩にかけて育てられた日本男児が、転んだ転ばされた云々で白昼路上の殴り合いたあね。それでも男かよ。ちんちん付いてんのか。付いてるわけねえやな。『権利幸福きらいな人に自由湯をば飲ませたい』大和魂知らない男にこの小説を読ませたい！」

山崎はリュックサックを地面に置くと、中から『あかつき草紙』を二冊出して一冊

ずつ男に渡した。

「なんだこれ、『あかつき草紙』？」

「そうだ。こいつは天下の春本『あかつき草紙』お江戸の遊郭を舞台に絡みもつれあう男と女の愛と情。ちんちん付いてんだか付いてないんだかわからねえようなお前らは、これでも読んで一から男というものを勉強しやがれ、この野郎！ ほら、ぼやつと突つ立ってねえで家に帰らないかい」

山崎が啖呵を切ると、男二人は文句も拳も出ず機会を失って、まるで犬が去っていくように背筋を丸めて群衆の隙間を抜けて去った。

さて、円状になった群衆だけが残っている。中心には喧嘩男に替わって山崎耕作ただひとり。全員の視線が山崎一人に注がれている。

山崎はどかつとその場に腰を下ろした。リュックの中から缶詰の空き缶を取出す。

「さあ、男だったら読んで当然、水野竜作『あかつき草紙』買ってみなさい読みなさい、残り十五冊、早い者勝ちだよ！ 一冊八円のところを、負けてやって六円だ！

さあ、誰が最初に買いに来るんだい。それ

ともみんな蚤の心臓で、この場に出てくることさえ恥ずかしいかい、どうなんだい！」

ぱちんと手のひらで地面を叩くと、輪になった群衆の中から男がひとり飛び出してきた。

「買った！」

男は山崎の前に金を放り投げると、ひつたくるように『あかつき草紙』を受け取って去っていった。第二、第三の男が飛び出してくるのはその一秒後だった。

まるで堰を切ったように人々が山崎の周りに詰めかけた。

「一冊くれ！」

「それはおれのだよ！」

山崎の頭に紙幣と硬貨が降り注ぐ。しめたとばかりに山崎は本を売りに売った。惜しいことに山崎が持っていた本は十冊であった。飛び出してきた人数に比べ、品物の数はあまりにも少なかったのである。ほんの数分の間に『あかつき草紙』はなくなってしまった。

（こんなになるんだつたらもつと刷ってお

けばよかつたな）

その場には山崎と散らばった金とが残された。硬貨一枚たりとも残さずに回収し、山崎は川上のいる場所に戻った。

「コーさん、何をしたんですか？」

川上は群衆の中に入ることができなかつたため、山崎の啖呵もそのあとの濁流のような騒動も見えていなかった。輪の外から声だけを聞いていた。

へへへ、と笑って、山崎はリュックサックを開けた。いっばいに入っていた『あかつき草紙』は皆売れて、その代わりに大量の金が詰め込まれていた。

「楽しかった」

山崎はそう一言だけ言った。

こうして新宿マーケットに持ってきた本はほとんど売り切れてしまった。予備が三冊残っているが、これは知人に配ることにした。

「こんなにはけるとは思わなかった」

「どうやらおれには商売の才能があるらしいぜ」

「もうやめてよね、僕は心配で仕方がなか

「つたんだから」

「さあね」

山崎と川上が撤収の支度をしていると、

「もし」

と声がした。

女が立っていた。若い女で、年頃は二十そこらといったところか。立派な呉服を纏い、もんぺ姿の女たちの中では特に華やいで見える。瞳はきりりと光っていて、唇が灰かに色づいていた。顔立ちは見事に整っている。

「もう本は売り切れてしまいましたか」

女は山崎に尋ねた。

「本？ ああ、本ですね。あと三冊ほど余っていますがお買い求めですか」

「はい。もし余っているのなら買いたいです」

山崎は予備の本を女に渡した。

（この女、どこかで会ったことがあるような……）

「お嬢さんは本をよく読むんですか」

川上が訊くと女は

「ええ、父が読書家で私も書齋でこっそり

読んでいました。でもこの前の空襲で家が焼けてしまって。蔵書もほとんど燃えてしまいました」

「それはお気の毒でしたね。しかしこの本はお嬢さんのような綺麗な方が読むような本じゃありませんよ。それでもいいんですか？」

「大丈夫です。さつきその方が口上を述べているのを聞いて、きつと素敵な本なんだろうなと思ったんです」

山崎はぺこつと会釈して「それはどうも」と言った。

引つかかる。この女の顔が、山崎の記憶のどこかに引つかかっているのである。ただ、どこに引つかかっているのかわからない。指に細いとげが刺さっているときのようなもどかしさがある。

（「どこかでお会いしましたか」と言うのもあれだなあ）

「それにしても見事なお召し物ですね。もしかしてどこかの企業の御令嬢ですか？」

川上が続ける。

「いいえ、これは私の親戚から貰ったもの

で……。もう戦争も終わりましたし、筆箱の中に閉まっていたお洋服を着てみるのもいいかなと思つて着てみたんです。似合つてるでしょうか？」

「はい！ とても似合っていると思いますよ」

「よかった！ それでは私はこの辺りで失礼します。ありがとうございます」

女が立ち去ろうとしたとき、

「あなた！」

山崎が呼び止めた。

「この前、といつても三か月以上前ですが、有楽町駅で雨宿りをしていませんか。女学校の制服を着て、アメリカ人を待っていますでしたか」

「え——」

女の目が大きく開かれた。

「どうしてそれを」

「おれは以前、有楽町駅で吸い殻拾いをしていたことがあります。そのときにあなたを見かけました。とても美しい顔立ちだったのでよく覚えています。こんなところでもたお会いできるとは思いませんでした」

「え、コーさんこの方とお知り合いなんですか？」

女はしばらく呆然として山崎の顔を見ていた。

「お名前を伺ってもいいですか？」

「山崎耕作といいます」

「山崎さん——」

女は山崎の耳元に口を近づけ

「見なかったことにしてください」

と言うと、逃げるように群衆の中に消えていった。

まったく突然の出来事であった。残された山崎も放心した。

結局彼女が何者なのかはわからなかったし、なぜ彼女が有楽町駅での出来事を無かったことにしようとしたのかは山崎にはわからなかった。

「今のはいったいなんだったんだろう」

山崎が何の気なしに頭に手をやると、白髪が一本人差し指と中指の間に挟まった。

改めて二人は荷物をまとめ、帰る支度をした。行きではばんばんに重かったリュックサックはすっかり軽くなっていた。それ

が今日の二人の仕事ぶりを象徴していた。

「このあとは一か月くらい様子を待ちましょう。もし何事もなければ、検閲はないものとして、いよいよ雑誌の創刊に向けて動き始めましょう」

「そうだな。とりあえずは様子見だ」

トラックは新宿のはずれのバラックの傍に停めてあった。からっぽの箱が荷台に乗っている。

「今日はいっぱい働いたよね」

夕方である。

浅草と同様に東京上空襲によつて焦土と化した新宿では、夕焼けを遮るものは何もなかった。すこし顔を上げれば鮮やかな夕陽が空の彼方に傾いていた。山崎と川上は並んで夕陽を眺めた。

すこししてトラックに乗り込もうとしたとき、トラックの前から三人の男がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。横一列になって歩いている。

「横に並ばれちゃあ、発進できないじゃねえか」

川上は機転をきかせてトラックを後方に

動かそうとしたが、サイドミラー越しに後方からも男たちがこちらに向かってきているのが見えた。川上は不穏なものを感じた。

「おい、そのトラック、止まれ！」

やはり。

山崎と川上はトラックから降りた。二人は六人の男たちに囲まれていた。男たちは皆、皮のジャケットを纏っていた。いくら配給の切符を払っても買うことのできない代物である。

「いったい何の用だ。エロ本なら売り切れちまったぜ」

山崎がにらみをきかすが、男たちは表情を崩さない。よく見ると、手にピストルを持つている者もいる。山崎は直感的に彼らはやくざではないかと思った。

シケモク拾いをしていた頃、新宿マーケットがやくざの巢窟であることを聞いていた。というよりも、新宿マーケットを生み出したのがやくざだったのだが、そこまでは山崎も知らない。

「ハジメちゃん、こいつらやくざだ。抵抗はしないほうがいいぜ」

男の中のひとりが山崎の前に立った。口からきつい煙草の匂いがした。

「兄ちゃん、さつき電柱の傍で本を売ってたよな」

「ああ、売っていた。エロ本を売ってちゃ悪いのか。隣には悪い薬を売っていたやつもいたぜ」

「売り物はどうだっていい。何を売ろうが勝手だからな。ところで兄ちゃんは、これ、持ってるかい」

男が懐から取り出したのは一枚の紙きれであった。

山崎は目を細めて書いてある文字を読んだ。

「……誓約書？」

「おう、誓約書。新宿マーケットで店を出す誓約書だよ。その顔だと持ってねえな？」
もちろん山崎は見たことも書いたこともない。

「おい隣の兄ちゃんも書いてねえな？」

川上は恐怖のあまり唇が震えて声が出ない。

「俺たちは新宿マーケットを仕切っている

関東尾津組のモンだ。あのな、誓約書も書かないでうちのナワバリで勝手に店を出されちゃ困るのよ。お前らも見ただろうが、マーケットには店を出している連中が山のようにいるが、あいつら全員が誓約書を書いて金をうちに納めてる。お前らだけだ、払わずに店を出しているのは。それに道のど真ん中であんな騒ぎを起こしやがってよ。立ち話もなんだ、ちよつと事務所まで来てくれねえか」

山崎と川上は男たちに囲まれて、すぐ近くの建物まで連れていかれた。コンクリート造りの建物で、空襲で焼け残ったのだらうか、壁は煤で真っ黒になっていた。表札の代わりに「関東尾津組 第三事務所」という札がかけられていた。

川上は今にも泣き出しそうな顔だが、山崎もまたすまし顔をしながらも内心では怯えに怯えている。二人の様子はさながら地獄の閻魔に面会しに行く罪人のように見える。

山崎と川上は一室に通された。

椅子に座った瞬間、組員のひとりが二人

を後ろ手に縛った。もう逃れることはできない。たとえ拘束を解くことができたとしても、部屋に留まっている組員たちに殺されることは目に見えているが。

「てめえら、今日はじめてマーケットに来たのか」

川上が山崎に一瞥を送った。答えてくれ、ということなのだろう。川上の歯ががちかちと合わる音が小さく聞こえた。

「はい、はじめてです」

「あ、そう。とりあえず、この書類書いてくれねえか。例の誓約書だ」

いきなり殴られるのかと思った山崎は、組員の対応が意外と事務的であることに驚いた。山崎の前に誓約書と万年筆が置かれている。万年筆はアメリカ製のものであった。

山崎は会社の名前と住所、そして自身の名前を書き、商売の目的を記入した。一文字でも誤字をすればその時点で叩き殺されるような緊張感が部屋に満ちていた。

「あの、罰金とかってありますか」

隣の川上が震える声で訊いた。

「あるよ。無断で他所のシマに入り込んだんだからな。それと、場所代とか諸々貰うぜ。」

「場所代とか諸々……」

「なんだよ、てめえただでマーケットに出せると思っていたのか？ 織田信長の楽市ですら場所代を払ってんだぞ。ほら、金については誓約書の下に詳しいことが書いてあるから読め」

山崎と川上は誓約書の文言を読んだ。

支払については以下の通り

- ・ 関東尾津組入会費 十五円
- ・ 組合費 三円
- ・ 支部費 二円
- ・ 塵銭 一円
- ・ 東京都道路占有料 一円
- ・ 直接税 二円
- ・ 間接税 一円
- ・ その他(場所代) 要相談

「場所代は、あの通りはいちばん人通りが多い場所だから五円だ。となると、とりあ

えず三十円だな。それに加えて違反料として売り上げの二割を貰う。ええと、てめえらの今日の売り上げが、六円の本が十六冊売れて九十六円だから、まあ端数は切り捨てて十九円にしといてやる。だから四十九円だ」

じつに売り上げの半分以上を関東尾津組に奪われることになる。

「それじゃ、僕たちは大赤字じゃないですか！」

「知るかそんなもん。てめえらが何も知らなかったのが悪いんだろ！」

組員が机の脚を強く蹴った。机の上の万年筆が床に転がった。

川上は悲鳴をあげたが、山崎はただひとり椅子にかけたまま組員を見つめている。

鋭い視線だ。上海にいた頃、上官をたじろがせたあの視線である。人生の半分以上を暴力の世界に置いてきた組員も、山崎の視線には震えるものを感じた。

「尾津組の人」

山崎は悠々と、しかし若干の怒気を含んだ声で

「たしかにおれたたちは何も知らないまま新宿に来て、あんたたちの規則を破った。それは申し訳ないと思っっているし、売り上げの二割を罰金として取り上げることに異存はない。十九円とすこし、端数も含めてきっちり払いますよ。ただ、この誓約書に書いてある諸々の支払い、これには文句を言わせてもらいます。このマーケットに来ている人間たちは皆、空襲で焼け出されてきたやつらだ。金も物もなく、あと一週間生きられるかもわからない人もいるはずだ。それなのにあんたたちは、組合費だの支部費だの場所代だのと言って金を巻き上げようとす。自分たちは何もしていないのに、だ。今床に転がっている万年筆、あれは日本の会社のものじゃない、アメリカ製の値が張るやつだ。そんな小道具に金をばら撒く余裕があるなら、ただで店くらい出させてあげたらどうだい。おれはこれまでいくつもの闇市に顔を出してきたが、店を出すために三十円も払わせる闇市なんざ見たことがないぜ」

と言った。

組合員の顔が紅潮した。肩がふるふると震えている。

「黙って聞いてりや、良い気になりやがって！ 勝手に店を出しやがったくせによ！」

山崎の頬に拳骨が飛んだ。さすがは暴力団だけあって拳は重かった。山崎は危うく椅子が倒れそうになったが堪えた。そしてまた、あの眼光で男を睨みつけた。

「またその目をしやがる。懲りねえ野郎だ、もう一発食らわせてやるよ！」

「やめてください！ コーさんも睨みつけるのをやめましようよ、もう何されるかわかりませんよ」

組合員の二発目の拳が振り上げられたそのときだった。

銃声。

がん、という凄まじい音が響いたと思つた次の瞬間、組合員の頭のすぐ横を弾丸が通り過ぎた。もう少し軌道がずれていれば、弾丸は耳、いや頭蓋をえぐつたであろう。弾丸は組合員の背後の壁にめりこんだ。火薬のにおいがほのかに香っている。

事務所の扉が開かれた。

黒の着物に黒の羽織。羽織の襟から右手がこぼれ、手には拳銃が握られている。髪は単発で、頭の側面はきれいに刈り上げられている。現在では「ソフトモヒカン」と呼ばれる髪型である。

「拳を仕舞いな」
五十歳ほどの男が低い声で言うと、組合員は慌てたように拳を引いた。他の組合員の背筋もぴんと伸びる。

「どうしてご客人を後ろ手に縛っているんだ」
「え？」

「どうしてご客人を後ろ手に縛っているんだ、と聞いているんだ。聞こえないか」
組合員は急いで山崎と川上の拘束を解いた。

「すまねえな、うちの人間が無礼なことを」
男は山崎と川上に言うと、山崎を殴つた組合員に視線を遣つた。組合員は何を言われるのかを察したのでろう。

「く、組長、これには訳がありました」
「……この人たちは娑婆(しゃば)の人間だろ。理由があれば娑婆の人間を殴つていい

って法があるのか」

「え、えー」

男は組合員を平手打ちした。風船が割れたときのような破裂音がしたと思うと、組合員は椅子ごと床に叩きつけられた。

男は椅子を戻すと、組合員に替わつて腰を下ろした。

「乱暴なところを見せてしまった。申し訳ない」

男は両ひざに手を置いて、ゆっくりと頭を傾けた。山崎と川上は、いったい何が起きたのか呑み込めていなかった。

「おい、ご客人にお茶をお持ちなさい」
入口に立っていた組合員が急いで茶を淹れた。

「粗茶です。遠慮なくどうぞ」

山崎と川上はおそろおそろ茶碗の中の緑茶を飲んだ。そのあとで、和装の男も茶碗を傾けた。

精悍な顔つきである。山崎に向けられた顔は穏やかだが、その裏に鋭利な刃物のような凶暴性があった。男は懐からたばこを取り出してゆっくりと呑んだが、その動作

もまったく無駄がなかった。

(この男、いったい何者なんだ?)

男は吸い柄を煙草盆に置くと、これまた
穏やかに

「関東尾津組組長、尾津喜之助です」
と言った。

【注】

①『りべらる』

…一九四五年十二月に太虚堂書店から出版された雑誌。菊池寛をはじめ戦前から活躍する作家たちが関わっており、現在ではカストリ雑誌の先駆けとされることもある。

②船橋聖一

…作家。行動主義小説、歴史小説、愛欲小説など様々なジャンルの作品を残した。代表作に『雪夫人絵図』。

③亀井勝一郎

…文芸評論家。左翼思想から出発したがのちに転向。雑誌『日本浪漫派』を創刊し日本美術や仏教を論ずるとともに、戦時中は日本文学報国会に属した。

④小島政二郎

…作家。国文学への深い造詣を下敷きに純文学・大衆文学の両方で数多くの作品を残した。代表作に『新妻鏡』がある。

⑤CCCD

…GHQ参謀第二部所轄の民間検閲機関。

民間通信の検閲管理と秘密情報の取得を使命とし、戦後本格的に日本メディアの検閲を行なったが、多くの日本人は組織の存在を知らなかった。しかし組織には約五千人の日本人が所属していたことが明らかになっている。

⑥緒方竹虎

…ジャーナリスト。東京朝日新聞社の中心人物として政党内閣期には「緒方筆政」と呼ばれるほどの力を握り、小磯内閣時代からは政府中枢に食い込んで活躍した。戦後はGHQ、とくにCIAに協力し、「POKAPON」のコードネームで呼ばれた。

⑦三原堂

…一九三七年から東京池袋に店舗を構える菓子屋。饅頭や煎餅などの和菓子も取り扱っている。江戸川乱歩御用達の店としても有名。

【付録「プレス・コード」項目一覧】

- | | | | |
|----|--------------------------------------|----|--------------------------|
| 一 | S C A P (連合国軍最高司令官もしくは総司令部) に対する批判 | 二十 | 大東亜共栄圏の宣伝 |
| 二 | 極東国際軍事裁判批判 | 二一 | その他の宣伝 |
| 三 | G H Q が日本国憲法を起草したこと
の言及と成立での役割の批判 | 二二 | 戦争犯罪人の正当化および擁護 |
| 四 | 検閲制度への言及 | 二三 | 占領軍兵士と日本人女性の交渉 |
| 五 | アメリカ合衆国への批判 | 二四 | 闇市の状況 |
| 六 | ロシアへの批判 | 二五 | 占領軍軍隊に対する批判 |
| 七 | 英国への批判 | 二六 | 飢餓の誇張 |
| 八 | 朝鮮人への批判 | 二七 | 暴力と不穏の行動の煽動 |
| 九 | 中国への批判 | 二八 | 虚偽の報道 |
| 十 | その他連合国への批判 | 二九 | G H Q または地方軍政部に対する不適切な言及 |
| 十一 | 連合国一般への批判 | 三十 | 解禁されていない報道の公表 |
| 十二 | 満州における日本人取り扱いについての批判 | | |
| 十三 | 連合国の戦前の政策に関する批判 | | |
| 十四 | 第三次世界大戦への言及 | | |
| 十五 | 冷戦に関する言及 | | |
| 十六 | 戦争擁護の宣伝 | | |
| 十七 | 神国日本の宣伝 | | |
| 十八 | 軍国主義の宣伝 | | |
| 十九 | ナショナリズムの宣伝 | | |